様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１２６４

研究課題名（和文）多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明

研究課題名（英文）Analysis of children's communication behaviors based on a variety of of everyday conversations

研究代表者
小磯　花絵（Koiso, Hanae）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授

研究者番号：３０３１２２００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、子どもの会話データに基づき、子どものコミュニケーション行動の発達過程について、特に会話分析・談話分析の手法により明らかにした。子供のコミュニケーション行動を多角的に分析するために、多様な場面の子ども中心の会話データ50時間を映像まで含めて収集し、形態論情報などを付与して研究に活用した。2024年度中にコーパスを一般公開するために、匿名化の処理なども研究期間中に実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の最大の社会的・学術的貢献は、研究のために収集・整備した子ども会話データをコーパスとして一般公開する点に見出すことができる。従来の研究では、母子間会話が対象されることが多かった。しかし本研究では、日常生活における多様な場面・多様な相手との会話を収集し、動画付き子ども会話コーパスとして2024年度中に公開する。代表者が構築に携った成人中心の日常会話コーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで長期に渡り実証的に研究できる基盤を整備することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed the developmental process of children's communicative behaviour based on their conversation data, emplying conversation and discourse analysis techniques. To capture children's communicative behaviour from multiple perspectives, we collected 50 hours of conversation data across diverse situations including video recordings, and annotated morphological and other information. Additionally, anonymization procedures were implemented during the study to facilitate the publication of the corpus in 2024.

研究分野：コーパス言語学

キーワード：子ども会話　日常会話　話し言葉コーパス　コミュニケーション行動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、乳幼児を含む子どもの言語行動に関する研究が数多く行われてきたが、国内での研究の中心は音声や語彙、文法面での発達過程であり、コミュニケーションに着目した研究の層は薄いという問題があった。しかしコミュニケーションに問題を抱える子どもが社会問題となり、その早期発見と対応が求められる中、子どものコミュニケーション研究を広く展開させることが、学問的・社会的に強く求められるようになってきた。子どもの言語研究では、養育者、特に母親の子どもに対する影響が強いことから、従来は家庭での母子間会話が研究の対象とされることが多かった。しかし成長するにつれ、友達や保育園の先生との会話といったように、多様な場面・相手との会話が重要となる。現実のコミュニケーション行動を多角的に分析するには、子どもの社会を広くとらえたデータに根ざし、相手や場面なども考慮した上で、その発達過程を多角的な観点から解明することが求められる。

２．研究の目的

こうした研究を推進するために必要となるのが、子どもの言語行動を記録したコーパスである。これまで CHILDES を中心に子どものデータの記録と共有化が積極的に進められてきた。しかし既公開データの大半は音声と文字化テキストであり、映像まで含めて公開されているものはほとんど存在しない。コミュニケーション行動に関する研究を今後広く活性化させるには、多様な場面・相手との映像データまで含めたコーパスの共有化が不可欠である。そこで本研究では、子どもを中心とする家庭を含む多様な場面・相手との会話を収録した上で、子どものコミュニケーション行動の発達過程を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

子どものいる調査協力世帯 7 世帯 10 児を対象に、日常場面の会話を収録した。収録のために集められた状況での会話ではなく、日常場面の中で自然に生じる会話を対象とするために、収録には研究者は立会わず調査協力世帯に収録を依頼した。またコミュニケーション行動を広く研究できるようにするために、音声データだけでなく動画データも記録した。更に家族との会話だけでなく祖父母や友人など多様な場面における多様な話者との会話をできるだけ収録するよう依頼した。収録したデータの中からデータの質や多様性などを考慮して 50 時間を選定し、データ整備を行った。こうして整備したデータだけでなく、成人中心だが子どものデータも含む『日本語日常会話コーパス』（代表者が中心となり構築・公開した動画付きの 200 時間の会話コーパス）や各分担者が独自に収集した子どものデータも活用して研究を進めた。

図 1 収録の様子

４．研究成果

(1)整備した 50 時間のデータは、2024 年度中に『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版として公開する計画である。規模については、159 セッション、228 会話、延べ話者数 544 名、異なり話者数 60 名である。コーパスとしては、動画データ、音声データ、文字化テキスト、発話単位情報、形態論(短単位)情報、レイアウト図、会話・話者に関するメタ情報を公開するとともに、形態論情報についてオンライン検索システム「中納言」でも公開する。図 2 は、対象児の月齢別にみた 発話単位長（語数）の推移である。月齢が

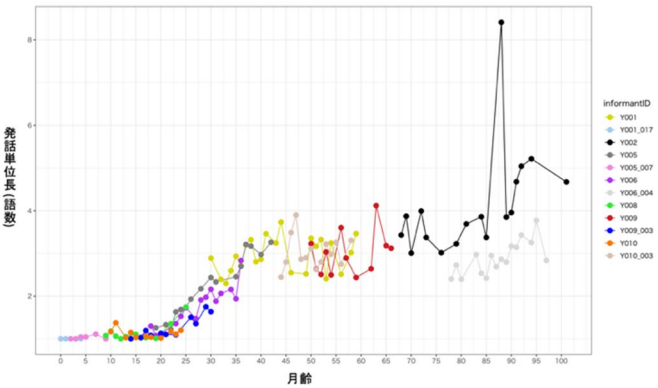

図 2 月齢別にみた発話単位長（語数）の推移

上がるにつれ、長い（語数の多い）発話単位を発話できるようになっていることが見てとれる。また図3は月齢別にみた平均モーラ長の推移である。成長するにつれモーラ長が短く、つまり、速く発話できるようになっていることが分かる。形態論情報や発話単位情報などのアノテーションが整備されたことで、こうした分析を容易に行うことのできるようになった。動画付きの大規模な子ども会話コーパスの公開はこれまでに例がなく、子どもの言語コミュニケーション行動を実証的に研究できる基盤として活用されることが期待される。

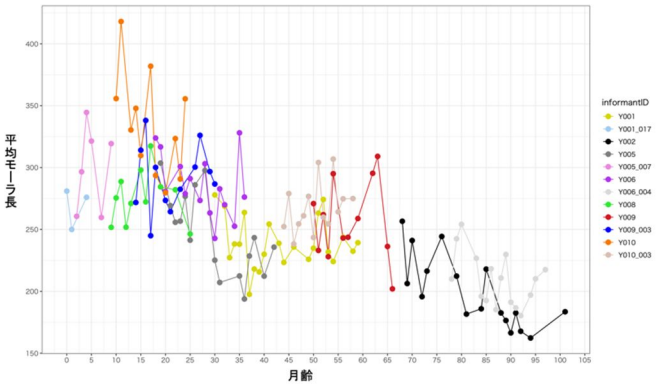

図3　月齢別にみた平均モーラ長の推移

こうして整備したコーパスや既存のコーパス・データを活用して次の研究を行った。

(2)日本語を母語とする幼児が助詞の「は」を使用しはじめた時期を焦点として、その時期に頻繁に用いられる[NP(名詞句)+は？]という形式の発話を会話分析的に分析した。その結果、[NP+は？]型ターンの多用は、幼児が、NPの指示対象をめぐって養育者とのやりとりを展開し、自身を取り巻く日常世界についての理解を獲得するための極めて有効な手続きであることを明らかにした。さらに、このような子どもの「は」の使用の分析を踏まえることによって、従来「トピックマーカー」と呼ばれてきた助詞の「は」の本質は、「は」が付加された名詞（句）の指示対象を今ここの状況に関連づけて理解せよという話者のスタンスを標示するものであることがわかった。

(3)特定の構文に着目した研究では、受益構文「…てあげる」の使用を社会的関係に関わる言語社会化として論じ、大人同士の会話における同構文の使用状況との比較も行った論文をJournal of Pragmatics誌の特集号内で出版した。家庭内において受益構文「…てあげる」はしばしば養育者（親）が年長の子どもに対し、年少の子どもにおもちゃを使わせることを指示する（「貸してあげて」等）場面で用いられ、年長者が年少者に対して優しく寛容に振る舞うべきという規範の教示でありつつ、同時に年長の子どもの動作主性を尊重するものであることを指摘した。

(4)家庭内宗教儀礼における言語社会化について、国際語用論学会での発表ののち、Research on Children and Social Interactionの特集号に寄稿した。年に一度しか行われない儀礼では、大人も儀礼内の行動について指示を受けるが、子どもに対する指示と大人に対する指示はスタイルの体系的な違いのほか、参与枠組みの利用や、身体的接触の有無等についても異なり、言語社会化における聞き手配慮の例として記述した。また、宗教的権威者である神職だけでなく、一般人である大人の参加者も子どもへの指示や肯定的評価という形での参加が見られ、言語社会化が複数の主体により協働的に行われているということを論じた。

(5)保護者と、その保護の対象として扱われる子どもの間では、頻繁に「依頼」「勧誘」「指示」など、日常生活の具体的な必要性に基づく「要求」やそれを「受け入れる」「断る」やり取りが頻繁に交わされる。ここで要求が受け入れられなかった場合に、保護者と子どもの間ではやり取りがどのように展開し、どのように意見の調整がなされているのかについて分析を行った。その結果、一度要求に拒否が返された後には、さらに要求、拒否が複数回連なり、両者の希望が平行線をたどる様子が観察された。このような局面で、保護者と子どものそれぞれは、代案提示や遊びのフレームの利用などといった方略を用い、やり取りに変化を生じさせ、意見の調整を進行、収束に向かうよう働きかけていることを指摘した。

(6)幼い子ども同士が話し合いに取り組む際の課題の一つは、意見を述べるためにその機会である発話順番を取得することである。幼稚園において子どもたちが多人数で話し合いを行う場面の観察を通して、子どもたちが発話順番の取得、維持、また産出する発話を他の参与者に聞いてもらうことに向けて、どのような振る舞いを行っているのかについて記述を行った。その結果、子どもたちは順番取得と同時に意見を述べるのではなく、一旦発声をして他者の注意を獲得したり、この直後に意見を述べることのみを予告することによって意見の内容を先送りし、その上で改めて意見を述べる様子が観察された。これは大人も用いていることが指摘されている、発話順番確保のための合理的なストラテジーである。これらのストラテジーを使った子どもたちが結果的に発話順番の確保に成功しているとは限らなかったものの、子どもたちは幼稚園でのこのような活動を通して、相互行為上のストラテジーとそれに対する対応について学んでいることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Endo, Tomoko	４．巻 7(1)
２．論文標題 Recipient design and collaboration in language socialization: Multimodal analysis of a Japanese household religious ritual	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Research on Children’s Social Interaction	６．最初と最後の頁 117-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Korenaga Ron, Mori Ippei, Sunaga Masafumi, Ikegami Satoru, Endo Tomoko	４．巻 5
２．論文標題 Embodied practice in a tidying up activity	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Research on Children and Social Interaction	６．最初と最後の頁 151-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1558/rcsi.12420	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 遠藤智子	４．巻 10
２．論文標題 家庭内における遊びと感情の表出：遊びの展開と対立のマネジメント	５．発行年 2021年
３．雑誌名 エスノメソドロジー　住まいの中の小さな社会秩序　家庭における活動と学び：身体・ことば・モノを通じた対話の観察から	６．最初と最後の頁 105-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takagi Tomoyo	４．巻 178
２．論文標題 Requesting an account for the unaccountable: The primordial nature of [NP+wa?]-format turns used by young Japanese children	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Pragmatics	６．最初と最後の頁 391-407
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2021.03.026	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Endo	4．巻 172
2．論文標題 The benefactive -te ageru construction in Japanese family interaction and adult interaction	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Pragmatics	6．最初と最後の頁 239-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2020.11.011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 小磯花絵
2．発表標題 『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の公開に向けて
3．学会等名 日常会話コーパスシンポジウムIX
4．発表年 2024年

1．発表者名 田中弥生・居關友里子・田中真理子・小磯花絵
2．発表標題 幼稚園における教諭主導の相談会話：脱文脈度の観点からの分析
3．学会等名 日常会話コーパスシンポジウムIX
4．発表年 2024年

1．発表者名 居關友里子・田中真理子
2．発表標題 幼児とのやり取りに対する談話行為タグ付与の試み
3．学会等名 日常会話コーパスシンポジウムIX
4．発表年 2024年

１．発表者名 遠藤智子
２．発表標題 家庭内相互行為における年長の子どもと親の協働
３．学会等名 シンポジウム『ことば・認知・インタラクション 12』
４．発表年 2024年

１．発表者名 居關友里子
２．発表標題 子どものごっこ遊びにおける設定共有の試み
３．学会等名 シンポジウム『ことば・認知・インタラクション 12』
４．発表年 2024年

１．発表者名 小磯花絵・居關友里子・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・西川賢哉
２．発表標題 『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築に関する中間報告
３．学会等名 言語資源ワークショップ
４．発表年 2023年

１．発表者名 居關友里子・小磯花絵
２．発表標題 親子の共同行為場面における振る舞いの調整 ： お菓子作りの事例から
３．学会等名 言語資源ワークショップ
４．発表年 2023年

１．発表者名 Endo, Tomoko
２．発表標題 Self-addressed question nandakke 'What was it' in Japanese child-adult conversation
３．学会等名 Longitudinal CA workshop（（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 居關友里子・小磯花絵
２．発表標題 幼児の発話順番取得のストラテジーに関する予備的考察 ： 園児の話し合い活動の事例分析から
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 滕越・小磯花絵
２．発表標題 日中バイリンガル児の中国語の発達に関する事例研究:物の受け渡しにおける「シェイシェイ（ありがとう）」に着目して
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 Endo, Tomoko
２．発表標題 De-ritualization as management of social roles: Multimodal analysis of ritual language and bodily behavior
３．学会等名 The 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takagi, Tomoyo & Morita, Emi
２．発表標題 Problem recognition display: The use of maa in Japanese everyday conversation
３．学会等名 the 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomoko Endo,
２．発表標題 Body-language collaboration in object transfer requests in Japanese conversation
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 28（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高木智世
２．発表標題 相互行為秩序と間主観性：定形発達児・非定形発達児の相互行為
３．学会等名 日本語用論学会第23回大会シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 居關友里子・小磯花絵
２．発表標題 子ども-保護者間会話における［要求-拒否］のやり取り
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 小磯花絵・居關友里子・柏野和佳子・角田ゆかり・田中弥生・宮城信
２．発表標題 子どもの会話コーパスの構築に向けて
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中弥生・滕越・小磯花絵
２．発表標題 作業遂行時における幼児と母親の会話のスタイルシフトと脱文脈化
３．学会等名 社会言語科学会第45回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高木　智世 (Takagi Tomoyo) (00361296)	筑波大学・人文社会系・教授 (12102)	
研究分担者	遠藤　智子 (Endo Tomoko) (40724422)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	居關　友里子 (Iseki Yuriko) (70780500)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関